

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第14回 三好照嘉

7歳で僧籍に入門する

三好照嘉は、明治19(1886)年12月26日、印旛郡小竹村(現在の佐倉市)に父高橋倉造、母みつの三男として生まれ、幼名を政五郎といった。

明治26年、父が村回りの行者から照嘉の僧籍入りを勧められ、東勝寺(宗吾霊堂)の管主田中照心(広報なりた平成29年8月15日号掲載)を頼って入門させた。その後、安食町(現在の栄町)の宝寿院に預けられ、同30年に得度した。

明治36年、宝寿院主の妻、三好寿々の養子となり、成田中学校へ入学した。宝寿院から成田中学校まで片道15キロの道のりを、往復4時間かけて徒歩で通ったという。同41年、國學院大學に入学し、優秀な成績で卒業すると、さらに豊山大学(現在の大正大学)で2年間修行を行った。そして卒業後、大佛頂寺(酒々井町)の住職となった。

第23世東勝寺管主となる

大正12(1923)年、第22世東勝寺管主の田中照心が遷化し、その後継者として37歳で第23世管主となった。



左/宗吾医療助産組合趣意書、右/昨年の御待夜祭の様子

宗吾霊堂では、佐倉宗吾の命日(9月3日)にちなんで、9月1日(土)・2日(日)に秋の例大祭「御待夜祭」が行われます。境内では露店が並び、町内では屋台が曳き廻されます。

明治19年～昭和37年(1886～1962)

印旛郡小竹村(現在の佐倉市)に生まれる。東勝寺(宗吾霊堂)第23世管主。7歳のとき、父が宗吾霊堂管主の田中照心を頼って入門させた。37歳で東勝寺管主となってから、大本坊の完成、宗吾医療助産組合の設立、宗吾保育園の設立などに携わった。



この頃、第1次世界大戦後の恐慌に加えて、昭和4(1929)年からの世界大恐慌で日本経済が危機的状況となり、特に医療体制の危機が深刻なものとなった。

照嘉は檀家の葬儀を執り行った際、その家族から「借金があり、医師に診てもらえなかった」という声を聞いたことをきっかけに、病気の早期診察と治療費の相互共済を目的とした組合の設立を考えた。昭和7年、照嘉を中心に、齊藤照勲(後の大佛頂寺住職)、方面委員(現在の民生委員)の鈴木千方人と共に東奔西走し、宗吾霊堂を事務所として相互医療助産組合を設立した。当初は警察からの事情聴取や、一部の医師からの妨害があり、会員は30戸ほどだった。その後、多くの人々の理解を得て、公津村と酒々井町の全戸が加入するまでに拡大した。この組合は国民健康保険制度のモデルとなり、当時の内務省も注目し、視察に訪れるほどだった。そのような経過をたどり、昭和17年に公津村国民健康保険組合が設立した。

東勝寺管主としては、昭和17年に大本坊の完成、同27年に宗吾霊三百年祭の開催、記念事業として鐘樓堂を建立するなど多大な功績を残した。また、地域の発展にも力を入れ、同31年に宗吾保育園の設立も実現させた。

このように東勝寺管主や、地域の指導者として多くの功績を残した照嘉は、昭和37年8月22日に遷化。76歳であった。

参考：『成田市史』近現代編

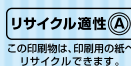
編集後記

毎月15日号に連載している成田ゆかりの人々も今号で第14回となりました。この連載は、小川国彦元市長が執筆した『成田ゆかりの人物伝』を基に、さまざまな文献を参考にしながら市立図書館の市史編さん担当と相談し作成しています。毎回、「この人はこんな事を行ったのか」と感心しながら原稿を書いています。成田ゆかりの人々では、関連する石碑や建物、行事などの写真も掲載していますので、ぜひ訪れてみてください。

平成30年8月15日号 No.1369

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。